追　加　資　料

「金魚のおうち」（いきものがかり）

資料１

「４月の学級経営・学級活動スタート７つの実践課題」
（「教育課程を生かした学級づくり」の手立て）

「保護者へのアンケート」の配布

①「出会い」の関係づくり

ア　教師と児童生徒との親和的関係づくりを工夫する。

イ　始業式、入学式の日に行う。

ウ　教師の自己紹介、人間的触れ合いの演技などの演出をする。

（保護者にアンケート（「どんな○年生になってほしいか」）を配布）

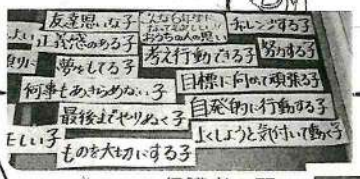
②「学級目標」づくり

ア　「目指す児童（生徒）像」を学級目標として提示する。

イ　始業式、入学式から数日後に行う。

（保護者の願い、児童生徒の思い、学校の願いを教師が統合し、知・徳・体の人格形成目標を設定する）

ウ　例えば、教室の前面の黒板の上などに掲示する。



保護者の願い

子供たちの思い

③「学級の組織」づくりーその１

ア　清掃などの当番（生活班）の組織や児童（生徒）会の委員会の組織などを編成し、所属を決定する（中学校の教科担当も当番）。

イ　②の前後に行う。

ウ　学校の基本方針の下に編成し、教室の壁面などに掲示する。

④「理想・めあて」づくり

ア　児童生徒一人一人の抱く「理想の学級生活のイメージ」を学級全員が共有し、各自が新しい学年の努力目標を設定する。

イ　学級活動の授業（例「○年生になって」）として実施する。

（学習や人間関係などに関する不安を解消し、期待感を高め、新しい学年での個人目標（学習・生活・運動など）を設定する）

ウ　「理想の学級生活」「個人目標」は教室の壁面などに掲示する。

※寄せ書きタイプ、小さな短冊タイプなど工夫を

⑤「学級の組織」づくりーその２

ア　学級会を運営する計画委員会、係活動の組織を編成する。

イ　学級活動(1)学級会の授業で児童生徒が組織をつくる。

ウ　計画委員会の輪番表、係の組織表は教室の壁面（学級活動コーナー等）などに掲示する。

①

題材「○年生になって」

⑥「実践活動」づくり

ア　学級会の活動や集団活動による実践活動をスタートする。

イ　⑤の後に「進級お祝いの会の計画を立てよう」「転入生を迎える会をしよう」などの学級会やその後の児童生徒による自発的・自治的な実践活動に取り組めるようにする。

ウ　背面黒板等に例えば「学級活動コーナー」なるものを設置し、活動計画や実践状況を掲示するなど工夫する。

②

議題「係を決めよう」

⑦「評価・改善」づくり

ア　学級経営案５段階完成法の第１段階計画の実際を振り返り、その後の指導の見通しを立てる。

イ　４月末か５月の連休前の区切りとなるときに行う。

ウ　教師から児童生徒に振り返りの結果を朝の会などで説明する。

③

議題「進級お祝いの会をしよう」

（※①～⑦のア＝「ねらい」、イ＝「いつやるか」、ウ＝「どうやるか」の説明）

資料２ 「学級活動の２つの指導法（基本型）」とは？

１「学級活動が目指す「２つの育成する力」

学級活動(1)学級会で （自治的能力の育成） ・（集団討議）で「集団実践目標の集団決定」 ――「３つの柱」と「3段階討議法」	学級活動(2)・(3)で （自己指導能力の育成） ・（集団思考）で「個人目標の自己決定」 ――「４段階展開法」

２「２つの指導法（基本型）」―― 準備・授業展開・実践の指導など

(1) 学級活動(1)学級会 ***"自分もよく みんなもよいことを"***

―― （特質）共同の問題、集団討議による集団決定（合意形成）、集団実践

○問題発見･･･議題箱、提案コーナー、オリエンテーションで
○議題の整理･･･計画委員会（複数の中から選定）
○議題の決定･･･学級全員
○活動計画の作成と承認･･･計画委員会、学級全員 →※学級会ノートに記入
↓
○本時の話合い（学級会）

（３つの柱）
話し合うこと１（何をするか）
話し合うこと２（どうやるか）
話し合うこと３（どんな役割が）

事前に短冊にしておく（B,C型の場合）

①	②	③
（出し合う）	（比べ合う）	（まとめる（決める））
④	⑤	⑥
（出し合う）	（比べ合う）	（まとめる（決める））
⑦	⑧	⑨
（出し合う）	（比べ合う）	（まとめる（決める））

＜３段階討議法＞

→A①～⑨　B②～⑨　C②～⑥　D④～⑨　E①～⑥

【指導のポイント】
A ①～⑨・・・本時（出し合う）から開始。
B ②～⑨・・・①は事前にしておき、②（比べ合う）から開始。※（推奨型）
C ②～⑥・・・①は事前に。時間の関係で「話し合うこと３」は、翌日等で実施。
D ④～⑨・・・議題や時間の関係で「話し合うこと１」は、事前に決めておく。
E ①～⑥・・・時間の関係で「話し合うこと３」は、翌日等で実施。

※B・Cを②から開始するのは、全体の時間的考慮と事前に柱１の案の理解の上で（比べ合う）段階の話合いを効果的に進められるようにするための工夫。

(2) 学級活動(2)・(3)

―― （特質）共通の問題（課題）、集団思考を通した自己決定（意思決定）、個人実践

○「学校の年間指導計画」から
○ 授業構想･･･指導案
○ 資料作成･･･段階毎、発達の段階を踏まえた資料づくりの工夫
↓
○ 本時の話合い
（４段階展開法）

導入－ (1)問題（課題）の把握
展開－ (2)原因の追求
(3)解決策
終末－ (4)個人目標の自己決定（めあてカード）

※児童の考えを生かしつつ、教師からも適切な指導事項を提示する。

資料３＜「学級会」の準備、活動などへの指導のポイント＞

活動場面等	低学年	中学年	高学年
1 議題集め	○特に１年生では、教師から２～３の案を提示して選ばせるようにする。 ○２年生では、１年生の経験などから議題を提案できるようにする。	○日々の生活の中から、学級会にふさわしい問題（議題案）を見いだし「議題ポスト」や「提案コーナー」などに提案できるようにする。 ○適宜オリエンテーションで、**「予想される議題例」**を話題にし、望ましい議題案について考えることが出来るようにする。	
2 計画委員会	○準備会を先生が説明しながらやって見せる。（１年生） ○**「活動計画」**に先生が記入しながら、徐々に先生のお手伝いを輪番で経験させる。 ○１年生の後半から**「学級会ノート」**に書けるようにする。	○**「１週間の活動計画」**にしたがって計画委員会を行い、議題案を整理し、複数の中から選定して学級全体に諮り、議題を決定できるようにする。 ○**「活動計画」**を作成し、それを学級全員に知らせる。各自が自分の考えを**「学級会ノート」**に記入したら計画委員に提出させる。 ○議題等によって**計画委員を増員**するなど工夫できるようにする。（黒板記録など）	
	○先生も一緒に**「活動計画」**を書きながら準備をする。 ○進行に関わる言葉遣いなどを練習させる。	○柱１は、様々な案をある程度まとめるなどして整理し、短冊に書いて**「学級活動コーナー」**に掲示する。	
	○実践のための**「条件」を明確にし、多くのことを決め過ぎない**よう留意する。		
4 直前の活動	○学級会当日の朝の会で、学級活動コーナーに貼った短冊について説明させ、給食の時間（会食）にグループで**短冊の案について話題にし問題意識を高めておく。** ○学級会前の休み時間に、**黒板等への掲示などの準備**をする。 ○低学年は、教師も進行係も、いわゆる首からさげる係札を用意し、中学年からは机上に表示を置くようにするなど工夫する。 ○**「出し合う」「比べ合う」「まとめる」**の表示を活用する。		
5 学級会 （開始から話合いの前まで） 1はじめの言葉 2歌 3計画委員の紹介 4提案理由等の確認 5めあて 6先生の話	○開会直後の**「役割の自己紹介」**は、立って「名前とめあて」を言う。その際、一人一人に（あるいは、計画委員の紹介が終わったら）全員が拍手をおくるようにする。 ○**「提案理由」「プログラム」「決まっていること」「準備日程」などの資料**を用意する。 ○**「提案理由」**は、全員で確認する。説明する工夫としてキーワードを何人かで発表することもあるが、あまり懲りすぎないようにする。 ○**「先生の話」**では、前回「次回の課題」にしたことを中心に話す。		
	○開会宣言に続けて全員で立って大きな声で歌を歌う。 ○入学当初は、黒板の前に集めて教師が進めるが、徐々に会議形式（いわゆるコの字）で行う。 ○**短冊などを司会と一緒に全員で読む**機会を多くする。（黒板記録が指示棒でなぞるのに合わせて） ○１年生では教師が進め、進行のモデルを示し、徐々に児童の役割を増やしていく。	○歌を歌うかどうかは、会議の内容など話合いの見通しから判断して実践できるようにする。 ○教師の位置は、司会などに並んで座り、司会や黒板記録がよく見えて適切な助言などがしやすい所にする。（ずっと立っていたり、やたら立ち歩いたりしない。）	

（話合い）	○基本的には、**「３つの柱」と「3段階討議法」**で進め、柱１は、幾つかの案を短冊にしておき、「比べ合う」から話し合うようにすると効率的。 ○**１年生の初期**は、例えば一時間の前半で話し合い、後半で活動するなど工夫し、徐々に基本型を指導する。柱２は「どんなやくそくがあったらいいか」で話し合うようにし、徐々に「たのしくする工夫」なども経験させる。 ○**教師の助言**は、司会にヒソヒソではなく、全体への指導として話す。 ○柱ごとの**時間配分**は、中学年以上で時計マークなどで大まかな見通しを立てるが、時間による決定を急がず討議を優先する。（司会が「時間になっていますが続けていいですか？」などと言って進める。） ○「比べ合う」では、賛成意見を理由を付けて発表していき、やがて疑問点や心配なことなど反対意見があれば出させ、その解決策を話し合うようにし**集団討議の充実**を目指すようにする。 ○柱１・２の話合いが焦点化し深め効率化が図られるよう、低学年から**「分類」**の指導と**「イメージの共有化」**のための助言をし、中学年では、特に分類は計画委員会等が自主的に行うことができるようにする。 ○「ぼくは」「私は」の発言だけでなく、**友達の発言に触れ、友達の気持ちを考えた発言**ができるよう状況に応じて適切な助言をする。 ○**司会**は、誰かが発言した後に**「ありがとうございました」**と言うこと。また、低学年では教師が司会の一人になり児童と一緒に話合いを進行するが**中学年からは司会同士で相談しながら進められるようにする。** ○話し合って決定する段階で、少数意見を尊重する観点から反対意見や賛成の少ない意見（項目）に対して「○○さん、どうですか？」と司会が確認する。 ○**黒板記録**は、司会等と相談しながら記録の構造化を工夫し、**「決定マーク」や「ありがとうマーク」**などを効果的に活用できるようにする。 ○柱３は、議題や話合いの見通しから**「どんな役割が必要か」**や**「役割分担をしよう」**などとし、進め方は簡略化を図るなど工夫できるようにする。
（決まったことの確認）	○**ノート記録**から、柱１～３のそれぞれの決まったことを発表する。（低学年は、指示棒のなぞりに合わせて全員で一緒に読むのも効果的。） ○決まらなかったことがある場合は、その扱いを司会が先生に確認して全体に伝える。（例えば、翌日の朝の会でするのか、**始業前の「学級タイム」**で決めるのか、など）
（ふり返り）	○**司会から**、「ノートを出してふり返りを書きましょう」と言い、時間内で発表してもらうことになっている場合は発表を促す。時間がない場合は、帰りの会などで発表し合うなど工夫できるようにする。
（先生の話）	○**「先生の話３原則」**（①前回よりよくなったことを賞賛する、②次回への課題を示す、③計画委員へのねぎらい）を基本にする。（その後、適宜個別に褒めたり助言したり指導する。）
6決定事項などの扱い	○決定事項などは、背面黒板（「学級活動コーナー」）などに掲示し、帰りの会などで学級の全員に知らせたりする。

〔留意事項〕
- 活動計画の用語や司会等の発言マニュアルなどは**発達の段階に応じて**作成する。
- 各種グッズの作成と効果的な活用について工夫する。
- 低学年は、歌を歌ったり（伴奏や指揮も）、議題などを全員で一緒に読んだり、動作化も取り入れたりするなど工夫する。
- 常に、実践活動については学年会などで話題にし教師間の情報交流と研究に努める。
- 例えば、柱３が未解決になった場合や話合いのオリエンテーションなどをする時間として「朝の会・帰りの会」や「始業前の○○タイム」（学校創意の時間）などを活用する。

資料４

学　級　会　の　議　題　例

（平成２８年以降の小中学校の実践例）

ア「学級の係を決めよう」
イ「「どうぞよろしくの会をしよう」、「〇年生もがんばろうね会をしよう」
ウ「室内ミニオリンピックをしよう」
エ「遠足の歌集を作ろう」
オ「学級のボールの使い方を決めよう」
カ「触れ合いの森の施設で七夕祭りをしよう」
キ「夏休み作品展の計画を立てよう」
ク「２学期もがんばろうね会をしよう」
ケ「学級文庫をたのしくしよう」
コ「児童集会での学級紹介ですることを決めよう」
サ「教育実習の〇〇先生にお礼の会をしよう」
シ「６－１川柳発表会をしよう」
ス「学級新聞コンクールをしよう」（※「（中）学年コンクールをしよう」）
セ「学級文化祭をしよう」（※(中)「文化祭の自由発表で何をするか決めよう」
ソ「廊下のクラス紹介コーナーの使い方を決めよう」
タ「読書まつりをしよう」
チ「収穫祭をしよう」
ツ「学級カルタ（すごろく）をつくろう」
テ「係の発表会をしよう」
ト「みんなのいろいろアンケート」をやってみよう
ナ「自然教室の夜の集いの出し物を決めよう」
ニ「２学期がんばったね会をしよう」
ヌ「学校に紙芝居を作って残そう」
ネ「手作り楽器音楽会をしよう」
ノ「学級立志の会をしよう」（※中学校）
ハ「卒業文集の内容を決めよう」
ヒ「おじいちゃんやおばあちゃんによろこんでもらうくふうをかんがえよう」
フ「委員会活動の学級報告会をしよう」
ヘ「鬼の面コンクールをしよう」
ホ「教室におひなさまを作ってかざろう」
マ「今年の思い出カルタを作ろう」
ミ「六カ年思い出アンケートをしよう」
ム「学級卒業を祝う会をしよう」

等

資料5

わが体験的特別活動実践論

すばらしきかな特活人生

日本体育大学教授
宮川八岐

〈その2〉小・中・高時代の運動会

夜間運動会での優勝記念写真
（上段左端がやき少年）

北海道八雲町立八雲小学校一年生のやき少年は、その年の運動会で母の疾走を見た。確か一番でゴールしたように思う。今に思えば生活がかかっていたから、商品獲得のために負けられなかったに違いない。思いのほか興奮したのを覚えている。

●やき少年とさっちゃん
—リレーの選手になってから

やき少年が二年生のときに、運動会でリレーの選手になった。母親譲りの天分だったのかもしれない。いや、おそらくあの藤村先生（四月号参照）の配慮があったのではないかと思う。

そのとき、同じ町内で近所だったさっちゃんも選手になった。さっちゃんとはそれがきっかけで、学校帰りは一緒になるようになった。そして、二人が保健所の近くにさしかかると、自然とかけっこになる。学校を出て南に四、五十メートル進むと十字路があって、そこを越すと二百メートルほどの直線道路になるが、保健所はその中間にある。保健所の真ん前は藤村先生の家で、そこがゴールになる。不思議にも、二人はいつもゴールが同着で勝負がつかない。今日は負かすぞと夢中で走っても、さっちゃんは必ず隣にいる。そうやって次第に二人は腕を、いや〝足を磨いて〟いった。

それから、やき少年とさっちゃんは二人でよく遊ぶようになっていた。三年生になる直前の転居近くまでのことである。

●「山の学校」の運動会
—徒競走への疑問とリーダー経験

小学校三年生の秋口、突然八雲鉱山小中学校に転校になった。早速運動会である。

（徒競走への抗議）

運動会や学芸会といえば、山を挙げての一大イベントである。子どもたちは燃えた。ほとんどの子どもたちは、足にヨモギを塗りつけて勢いづける。普段はゴムの短靴なので、走っていても汗でぬるっとしてしまい、すぐ脱げてしまうが、運動会となるとかけっこ用の白足袋（たび）を買ってもらえる。ヨモギと足袋のおかげで、ずいぶんと速くなったように感じる。複式の学級だから一人が何種目にも出場する。リーダー役もあり応援もありで、なかなか大変である。しかし、その大変さが充実感にもなって結構張り切っていた。

やき少年は、やはりリレーの選手になった。学年によっては全員リレーもあった。問題は徒競走である。やき少年はいつも一位になる。しかし、気になることもあった。常に順位は決まっていたから、びりの者の気持ちを案ずずにはいられなかったのである。何で大衆の面前で、歴然としている結果を見せつける必要があるのか。なぜ、運動会だけそうなのかと、ずっと思っていたのである。びりになる子は、決して運動会など楽しいと思うはずがないと思っていた。やき少年は、五年生のときの徒競走はわざと転んでびりになって、静かに教師に抗議したものである。

（中学生のがんばり）

山の学校では、中学生ががんばる。毎日の朝会でのラジオ体操の後の応援合戦では、先頭になってがんばる。運動会では、会場準備から道具作成まで、中学生全員がリーダーとなってがんばる。組体操で大見得をきる。全校の子どもたちや大人たちの歓声に、無理な技にも歯を食いしばって耐えながら意気に燃えてがんばる。いくつかの大人のグループと一緒のリレーでもがんばる。

山の学校の中学生には、がんばる機会が多い。そのがんばりが、大変だがやりがいだったように思う。それが、やき少年の高等学校時代や大学時代の勉学、そして生きることへのがんばりにつながり、その後の人生に大きく影響を与えたように思う。

●青春時代の夜間運動会
—勤労学生の勢いと感動

北海道立八雲高等学校定時制課程には、全国的にも珍しい夜間運動会があった（現在は定時制課程自体がない）。やき少年は、山の中学校を卒業し町の書店に住み込みで働きながら、この青春の学舎に昭和三十六年四月から四年間通った。

（勤労学生の生きる勢い）

定時制課程には、さまざまな職業に就いて働く学生がいる。家業を手伝う者、やき少年のように町の大きな書店（事務機、文房具類なども扱う）などに住み込みで働く者、郵便局や電報電話局、役場や学校の事務等の仕事に従事する者、病院の看護婦、町の電気店や呉服店、自動車修理工場や雪印乳業などの企業で働く者など、実にさまざまである。

そうした職業に就く若き学生たちの生活は決して楽ではなく、不安や悩みも多かったが、だれにも生きる勢いがあった。

（「連帯の勝利」に感動）

やき少年が二年生のときの運動会である。学生三十数名がよく連帯した。学年対抗で成績を競う運営形式になっているので、運動会までの短期間に作戦を練ったり、学年の出し物を考えたりしなければならない。しかも、日勤、準夜勤、夜勤の勤務形態の看護婦をはじめ、さまざまな事情を抱える学生たちは取組の調整に困難を極めた。

怪力リレー

しかし、二年生は三、四年生を抑えて総合優勝したのである。カマス（穀類などを入れる袋）に砂を入れて背負って走る怪力リレーは圧巻であった。夜の町中のマラソン、いつ練習したのかと驚かれた花笠踊りの出来栄えなどは見事であった。まさに連帯の勝利であり感動である。

（ユニークな準備と生徒会活動）

夜間運動会は十八時開催である。十五時過ぎから徐々に会場準備が始まる。その準備がユニークである。やき少年は配達の途中に会場準備に立ち寄り、テント張りの仕事をする。青果店に働く者は時間を見つけてライン引きにやって来る。電気店に勤める者は夕刻に照明関係を仕上げに来る。今と違って、百ワットの電球をいくつも連ねるのである。何とか総力を挙げて運動会開始に間に合わせるのである。

生徒会活動も運動会関連の恒例行事に取り組む。やき少年は四年生になって生徒会の会長を務めることになり、運動会の一か月ほど前には生徒会主催の映画会の実施に取り組んだ。町にある第一劇場の社長に掛け合って資金作りを成功させるのである。

共に生きる仲間たちのために、無我夢中で燃えた青春時代のダイナミックな集団活動である。

資料6

わが体験的特別活動実践論

すばらしきかな特活人生

英語の中道先生と放課後の子どもたち（後ろの帽子の少年が当時のやき少年）

日本体育大学教授
宮川八岐（みやかわやき）

〈その7〉山の学校の弁論大会改革物語

八雲鉱山小中学校には、学校行事としての弁論大会があった。その代表者は町の大会に出場する。八雲町中学校弁論大会は、部活の野球と陸上の大会に次ぐ大きな大会であったように記憶している。

●やき少年の「弁論大会への不満」

——選手になった中一のときから

どういうわけか中一のときに、やき少年はいわば選手の一人になった。テーマは先生に作ってもらい家で作文して先生に見てもらうのである。しかも、大幅な修正があった。それだけで意欲が薄れ練習にも身が入らなかったことを覚えている。練習の意味もあってか、町の大会に出場する前に校内で弁論大会なる行事が実施された。

やがて、町の大会の日がやってきた。へき地の各地の学校の代表が参集した。八雲中学校の代表もいた。その中には、やき少年が八雲小学校に在籍したころの顔見知りの生徒の顔も見られた。やき少年は結局入賞はしなかった。原稿を見続けて発表したような記憶がある。ますます不満が高まった。「弁論大会は、そもそも校内行事をするにも全児童や生徒が協働するでも工夫し合うわけでもない。楽しくも何ともない」そんな気持ちでいっぱいになったのである。

●「弁論大会改革の実現」

お話会を提案し、炊事遠足を実践してきたやき少年も、そのころ人並みに反抗期に入っていたようで、弁論大会への不満を表面化させるときがやがて到来する。

（やき少年中二時代の反抗と提案）

一年後のことである。また、弁論大会の時期がやってきた。そんなある日、やき少年は、担任教師に訴えた。

「先生、弁論大会なんかなぜやるんだ。運動会や学芸会などの学校行事とはまるで違って、一部の生徒がさも立派そうなことをくっちゃべって、それを多くの者がただ聞いて、ちっとも楽しくない。もう止めたらどうですか。」と、まさに反抗期らしい口調で言ったのである。担任は、

「やき何言ってるんだ、弁論大会は弁論大会のねらいがあって、中学生には必要な行事だ。町の大会もある。青少年期に経験させたい大事な学習だ。」

と言う。それに対して「だったら、なぜ全員に経験させないのか。」「何だったら、参加者全員が楽しめるように、休み時間を作って何かの催し、例えば合奏や合唱などを途中に入れるという具合に。」と次々にやき少年は反抗的にも提案までし始めたのである。

そのとき担任が、「そんなこと言うなら、やきたちが今の話をまとめてきちんと提案し責任をもってやるというなら、校長先生に話して弁論大会を変えてもいいぞ。」と言ったことから、事態は新たな方向に向かうことになっていった。

（「ミニ演奏会の提案」と学級の取組）

翌日の朝の会の時間であっただろうか、やき少年は、

「みんなに相談があるんだけど、弁論大会がつまらないから、そのやり方を変えるという提案を先生にしたら、みんなでやることを考えて責任をもって取り組むんだったらいい、という答えをもらった。みんなで演奏会を途中に入れたらと思うんだけどどう思う。」と発言をした。

すると、「いいと思うけど、だれがどうやって進めていくのか、やきが準備してくれるなら協力してもいい。」「そうだ、そうだ。」と意見が続いて、結局、『村のかじや』ともう一曲を決めて、やき少年が編曲して、みんなで分担してやるということが決定されたのである。

やき少年は、担任から藁（わら）半紙を数枚いただいて持ち帰り、夜遅くまで長屋の暗い電灯の下で、五線を引きどの楽器をどこでどうと、それこそ適当に編曲したのである。

それからというもの、休み時間や放課後にみんなが練習を始めたのである。複式学級だから二十数人にはなる。そして、やきが提案者なんだから指揮を、と指名される。音楽の先生の下に足を運び、何とかそれなりにやり方を決めることができた。一週間程度の取組だったであろうか。

（弁論大会・演奏会の日がやってきて）

いよいよその当日がやってきた。二教室を通して会場が作られた。弁論大会とはいっても数人の弁士が発表するだけである。それをわざわざ二部に分け、演奏会を挿入しての実施である。

ドン、チャッチャと演奏が始まる。おそらく、今にしてみれば中学生とはいえ、現在の小学校低・中学年程度の実力であったかもしれない。しかし、一人の人間の不満から生まれた提案を二学年のみんなが受け入れ協働して自発的に練習をし、今こうして演奏会を実現していると思ったとき、瞬時に感動がこみ上げてきて、やき少年は涙を抑えながら指揮棒を振ったのである。

●山の学校の教育力（指導の柔軟性）

——自発的活動を生かす教師集団が

本連載その4（七月号）の「刺激的だったへき地校合同型移動教室」でも触れているが、当時は学習指導要領昭和三十三年改訂時で、わが国の学校教育の基盤的枠組みが確立したころである。特別教育活動や学校行事が必修化され、児童生徒の自発的、自治的活動が重視されることになったときである。

正にそのころ、やき少年が中一だった。もしかすると、山の学校の教師集団が、新しい国の教育の方向を積極的に受け止めていたことから、やき少年の提案が生かされることになったのかもしれない。語彙量も知識量も貧弱だった子どもたちの人間力、その底力を育成する教育力が北海道の山の学校にはあったのかもしれない。

ちなみに、やき少年の提案がなぜ演奏会だったのかについて付言しておきたい。やき少年は音楽のテストで一度も歌ったことがなかった。教科書を持って立ちはするが、発声ができなかったのである。しかし、教師も同級生たちも一度も責めたりばかにしたりはしなかった。だからいつかは音楽的な面でお返しを、という不思議な気持ちを小・中学校とずっともち続けていた。その気持ちがとっさに「例えば、演奏会を」という発言になって出てしまったような気がする。

やき少年の思い出の弁論大会改革物語は、これからの学校力、教師力の参考になるかどうか。

資料7

特別活動の小中一貫教育
～中学校区の合同実践研究の成果と課題～

元文部科学省初等中等教育局
視学官・前國學院大学教授
宮川　八岐（やき）

ポイント

①学習指導要領上での特別活動は、「小中一貫」になっているが、学級活動においては、これまで小と中の取り組みに大きな違いがあった。

②中学校区の小中合同の実践研究で、大きな成果を挙げている事例があり、その取り組みの大きな広がりが期待される。

③都道府県市町村の教育委員会主催の研修会や研究指定などの取り組み、教育研究会の組織の改善などにより、新学習指導要領の趣旨のより確かな実現が望まれる。

小中一貫教育と学習指導要領

かなり以前から中高一貫校の創設をはじめ「小中一貫教育」への取り組みが進んでいる。

先日も、ある市の教育長が「先生、本市において小中一貫教育の充実に取り組んでおります。特別活動においても同様に…。」とおっしゃるので、その内容をお聞きすると、交流中心の小中連携への取り組みの話だった。

考えてみると学習指導要領は、小中一貫になっているはずである。教科においては、内容の系統を発達の段階に応じて一貫であり、特別活動においても、構造的には一貫した内容構成になっている。しかし、教科書がない学級活動の指導は、多くの学校において小学校と中学校とでは一貫性がないというのが現状である。

私は昭和44年度から教職に就き、教諭、教頭、市教委、校長、文部科学省、大学と学校教育に携わってきたが、その間ずっと「何とかならないのか」と思い続けてきたことの一つが、学級活動の小中一貫の指導充実である。

今次改訂における「小中一貫の学級活動」の取り組みへの課題

いわゆる「三〇年改訂」の学習指導要領には、幾つかの新たな課題が示されているが、特別活動においても同様で、その対応等について教育委員会主催の研修会や各種の研究会の話題になっている。

その中で、中学校の特別活動第2〔学級活動〕3「内容の取扱い」(1)において、「（略）集団としての意見をまとめる話合い活動など小学校からの積み重ねや経験を生かし、それらを発展させることができるよう工夫すること。」が明示されたが、このことが全国の小・中学校においてどれだけ重要課題として受け止められ、指導改善に取り組むようになっているかはなはだ疑問である。

この一項が新たに書き加えられた経緯は定かではないが、恐らく中教審特別活動ワーキンググループの検討やその際の資料が反映されてのことと推察される。

その資料というのは、一つが、授業が成り立たなかった小学校が学級会の指導改善で立ち直った事例（やがて、進学先の大荒れの中学校も正常化していった。）で、もう一つは、学級会の指導充実によって多かった不登校や欠席数の解消が図られた事例である。しかも、両者とも生徒指導上の改善だけでなく、学力向上も図られており、そのデータも紹介されたものである。

中学校区による小中合同研究の成果を全市的取り組みに拡大する教育委員会の支援

平成21年度から前述の小学校が学級会を通して児童自身による豊かな生活づくりの実践活動の指導に取り組み始めた。生徒指導や集団活動の指導観を改めることから始め、望ましい集団活動としての学級会や係活動の意義の理解や指導の成果を徐々に高めていき、その成果は、進学先の中学校をも変えていった。

そのことから中学校の教師たちは小学校の学級会の授業を参観するようになり、やがて、当該小学校と中学校の小中連携、そして中学校区の小学校2校と中学校による「小中一貫の学級活動の合同研究」へと進んだのである。

その取り組み方や成果は、教育委員会主催の「夏季一日研修（市内各小中学校悉皆参加の研修）」（写真）で発表され、全市的な中学校区の取り組みに広げられた。

この研修会で発表したK中学校は、小学校と一貫した学級活動（特に学級会の指導）に取り組んだ成果を次のように述べている。

- 小中の学級活動が一貫したことで中1ギャップが解消された。
- 話し合いで折り合いを付けて結論を出すことができるようになった。
- 個人のわがままな言動が少なくなり、問題行動もなくなった。
- 自発的な活動が多くなり、生徒会や専門委員会、部活動の話し合いなどの活動が円滑になってきた。
- 教科の学習にも学級会の理由を述べる発言方法が生かされている。

等々

この中学校区の小中合同研究の2つの大きな研究内容の柱は、次の(1)と(2)である。

(1)「年度初めの学級経営・学級活動スタート7つの実践課題」への取り組み（基本型として共有①）

その7つとは、①始業式・入学式の日の「出会いづくり」、②「学級目標づくり」（学校教育目標の学級化）、③「学級の組織づくり」（その1・生活指導）、④「理想・めあてづくり」（理想の学級生活・個々人の実践目標の指導）、⑤「学級の組織づくり」（その2・自治的活動組織）、⑥「実践活動づくり」、⑦「評価・改善づくり」で、④～⑥が学級活動の授業。⑦は教師による4月1か月（①～⑥）の学級経営の振り返りである。

(2)「学級活動2つの指導法」の「理解と授業研究」への取り組み（基本型として共有②）

2つの指導法とは、①学級活動(1)学級会の指導〈「3つの柱」と「3段階討議法」〉と、②「学級活動(2)・(3)の4四段階展開法」であり、特に、児童生徒による自発的・自治的活動としての学級会の授業研究を中心とした取り組みである。

今後への期待

学級活動の研究校では、「学級に親和的な人間関係が生まれる」「話し合って創意工夫し合い、創造的に問題を解決しようとする態度が育つ」「不登校や欠席が減少」「自己有用感や自己肯定感が高まる」「自発的な態度や学習意欲が高まり、学力テストでの国語B問題の成績が向上」などの共通の成果がみられるという。

しかし、このことを多くの学校、教育委員会等は理解していない。前述の教育委員会が、学級活動を全市的な中学校区ごとの研修としたのも、大荒れの小学校、中学校が私の指導助言で驚きの変化と大きな成果を挙げたからである。

免許法や大学の授業改善を待つまでもなく、都道府県市町村の教育委員会主催の研修会や研究指定の取り組み、教育研究会の組織を小中一体にし、全国の市や町に拠点となる研究校（中学校区）を設置するなどが進むことを期待したい。

※詳細についての質問は、「宮川八岐ホームページ」の「問い合せ先」から→

資料８　「学校童話集（６編）」の本を読んだ方々から

「やき先生の学校童話集」（１年生から６年生までの学級会物語）を出版して、これまでに次のような嬉しいお便りなどをいただいております。

ア「このような特色ある児童書はこれまで出版されていませんでした。**画期的です。**是非、子供達に読ませたいので**学校図書館用として６冊**注文します。」

イ「現在、初任者指導に当たっているが、これまで指導してきた初任者や現在指導している**初任者にプレゼントしたい。**」

ウ「この本は、**学級会物語**となっていますが、**学級経営の工夫**も大いに参考になります。校内等の学級経営研修会に活用させていただこうと思います。」

エ「学級会の素晴らしさを知らない子供達、学級会やその指導のイメージが持てないで困っている教師があまりにも多いというのが実態。**この本が早く全国の先生方に届くように**と願っています。」

オ「私は８０歳になりました。今の学校を見ているといろいろと大変なようですね。**今こそ本市の子供達に、そして先生方に是非読んで欲しい本**が出ました。市内５０校に２冊ずつ贈りたいと思いますので１００冊注文します。」

カ「いじめ問題、不登校、学級の荒れ・・・。学級会の充実で立ち直っている学校、未然防止になっている実態があるのに教育委員会等での研修が不十分。**この本の物語はどれも実践事例**とのこと。読んでみるとなるほどと思わされます。先生方に勧めます。」

キ「本を贈っていただいてから、まず私が一気に読み終えて**先生方に回覧**しましたら、ほとんどの先生方が注文したいと申し出てくれました。」

ク「**学校童話集を学級文庫に置いたら**、子供達が我先にと争った後ジャンケンをして順番を決めて夢中で読んでいます。早速、議題を提案する子も・・・。」

ケ「**市の研究会の役員会があります。そこでチラシを配りますので**送って下さい。こちらで増刷りをして配ります。それをそれぞれの学校でも紹介するように勧めます。この本は、**学級会オリエンテーションでも使えますね。**」

コ「放送朝会で、学校童話集を贈呈していただいたことをお知らせすると、早速読んで**児童が感想文を書いてくれました**のでお送りします。」

サ「サークルで購入し、月例会で勉強します。」

シ「**クラスで読み聞かせをした**翌日、「先生、昨日読んでもらった本の作者の宮川先生は、僕のパパの担任だったんだって！」と言う子がいまして・・・。」

ス「校長室登校をしている小６の男子児童に、「この本読んでみる？」と手渡すと、真剣に読み始め、読み終わるといつもと違って爽快な顔をして教室に向かい、**この本を読んだ翌日からは教室登校になり**、欠席にしていた修学旅行にも参加し、日々積極的に活動しています。驚きです。この本に感謝です。」

セ「新聞で知り、ビックリです。早速書店に注文して購入しました。先生は童話作家になったんですか？**母にも送ったら感動して近所の人に自慢をしてました。**

ソ「私は、来年教員になるためにやき先生の講演をお聞きし、この本を手に入れました。私の小学校時代にはこのような経験はありませんでしたし、大学でも学んでいません。何度も読んでみると、**学級会の指導を通して学級生活を生き生きさせるイメージができました。**」

タ「この本を読んで、集団活動を生かした学級づくりの必要性を実感し、**急遽全小中学校と講師（宮川）をオンラインで結んで研修会を実施**することができました。感謝です。」

チ「先日の６年生の学級会の授業で、柱２の「思い出に残るような工夫をしよう」の話合いで、「学級文庫にある本の紙芝居作りのように、僕たちも紙芝居を作って学校に残すことをやりませんか」という意見が出て、賛成が続きました。**早速、学級文庫に学校童話集を入れた成果が出ました。**」